

院内学級における遠隔国際交流の可能性

— 台湾輔仁大学日本語クラスとの二年間の実践を通して —

山本裕一*1, 楊錦昌*2, 林玉恵*2, 謝昀叡*3, 小柳千佳子*4

*1 北海道大学情報基盤センター, *2 輔仁大学日本語文学系, *3 北海道大学高等教育推進機構,

*4 札幌市立北辰中学校ひまわり分校

sierra@iic.hokudai.ac.jp

Possibilities for Remote International Exchange in Hospital Classes — A Two-Year Practice with the Japanese Language Class at Fu Jen Catholic University, Taiwan —

Yamamoto Yuichi*1, Yang Chin Cheng*2, Lin Yuhui*2, Hsieh Yun Jui*1, Koyanagi Chikako*3

*1 Hokkaido University, *2 Fu Jen Catholic University, *3 Hokushin Junior High School Himawari Branch School

概要：院内学級は、長期入院を余儀なくされる病気療養児に対して学習機会を保障すると同時に、外部との交流を通じて心理的安定や社会的成長を支える役割を担う。本稿では、北海道大学病院院内学級「ひまわり」と台湾輔仁大学日本語学科の学生による遠隔異文化理解授業を、2023年と2024年の二年間にわたり実施した事例を報告する。台湾側学生の日本語学習意欲やチームワーク、国際交流・社会貢献意識の向上が確認されるとともに、日本側児童には学習意欲や心理的安定に寄与していることが示唆された。

1. はじめに

2012年に策定された国のがん対策推進基本計画において、小児がんは重点課題と位置づけられた。小児がん患者とその家族が安心して適切な医療や支援を受けられる環境整備のため、2013年2月には全国に15の小児がん拠点病院が指定され、北海道では北海道大学病院が地域における中心的役割を担っている。2019年の整備指針見直しでは、AYA（思春期・若年成人）世代の患者への医療・支援対応が指定要件に追加された。北大病院には小児・AYA世代がんセンターが設置され、治療に加え、療養中の子どもたちが健康な子どもたちと同じ生活・教育環境で医療や支援を受けられるよう、院内学級や地域学校との連携を目指している。

2. 北大病院院内学級ひまわり分校

北大病院院内学級ひまわり分校は札幌市内の小中学校の分校という形式をとり、道内外から治療のため入院している子供たちを毎年、小学生約30名、中学生20名程度を受け入れている。主な目的は長期・短期入院による学習の遅れを解消することだが、小児がん等の重篤な症状による入院や治療で陥りやすい空間的・心理的な閉鎖的、抑圧的な状況にある療養児の心理的安定を図ることも重要視されてい

る。そのため、「気持ちの開放を図り、外に開かれた友人との交流を図る」ことは回復への意欲につながるとされている[1]。北大病院院内学級ひまわりでは、テレビ会議やWeb会議システム、SNSなどを活用し、国内外の多様な人々との異文化交流を行ってきた[2, 3]。

3. 複数の院内学級が参加する異文化学習

これまで我々は、総合学習の一環としてアラスカ大学、国立天文台ハワイ観測所、サウジアラビアキングサウド大学、北大北京オフィス、中国東北師範大学、ベトナム、マレーシア、台湾とテレビ会議システムで連携してきた。これは異文化理解・コミュニケーション、各教科の発展的補完を目的とした総合的な取り組みであり、各教科の学習への動機付けとなる授業として実施してきた。しかし、海外からの遠隔授業は講師の都合などにより定期的な実施が難しく、実施できた場合でも病気療養児の容態によって参加できる児童が限られ、貴重な機会を十分に活かさないこともあった。従来は主にTV会議システムを利用してきたが、コロナ禍で普及したZoomを導入したことで、大阪大学院内学級、関西医科大学院内学級に加え、札幌市立山の手支援学校、新潟県立柏崎支援学校、刀根山支援学校訪問部（ベッドサイド）など、都合の合う施設にも参加してもらうことで、

児童の不参加による授業中止を回避している。これまで機材や回線の問題で参加困難だった施設も加わることで、ある程度年間計画を立てることが可能になった。今後は各教室で行われる異文化学習などで共有できる教材や活動を増やしていきたいと考えている[4, 5]。

4. 台湾輔仁大学日本語クラスによる授業

輔仁大学は台湾新北市に所在し、台湾で唯一のカトリック系総合大学として知られる。全人的成長を重視する教育理念のもと、語学教育と国際交流に強みを持つ。日本語文学系のカリキュラムにおいて、2年次の必修科目である『進階日語 (Advanced Japanese)』は、一年を通じて日本語の五技能の統合的伸長をめざし、人文・社会的トピックを扱いながら、主体的学習と協働を重視する構成となっている。本実践では、同科目に院内学級との国際協働プロジェクトを位置づけ、学生は台湾文化の紹介動画を企画・制作し、日本の児童に伝わる表現の選択や質疑応答を実践することを目的とした。この経験は、学生にとって日本語運用力の向上に加え、社会貢献・国際協力への意識を育む場ともなった。

5. 授業の概要

2023年11月、2024年6月に輔仁大学の「進階日語(上級日本語)」履修生である2年生約30名が参加し、日本側からは北大病院院内学級と新潟県立柏崎特別支援学校の児童生徒、小中学生計6名、後日録画を視聴する形で札幌市立山の手支援校の中学生在が参加した。第1回目の授業は学生を4,5名の7組に分け、朝食の店、立冬の食べ物、台湾の寺院、夜市、文化地区など台湾に関するさまざまなトピックを紹介してもらった。授業時間は45分と限られていることから、リアルタイムで学生が話すのではなくあらかじめ4,5分程度の動画を作成してもらった。これにより学生側は過度に緊張することなく、途中で滞ることもなく余裕を持って様々な表現方法でプレゼンすることが可能となった一方、一部の発表者側で画面共有や音声の不具合が生じ、質疑応答時間の確保に課題を残した[6]。2年目の第2回授業では、発表学生によるZoomコンテンツ共有時のトラブルや質疑応答の時間の不足を踏まえ、授業構成を大幅に見直した。具体的には、発表に用いる動

画を事前にホストである北大側に提出してもらい、日本側の教室で一括して再生し、Zoomの画面共有を北大側がコントロールする方式に変更した。これにより、不慣れな学生の操作ミスに影響されことなく、授業を円滑に進めることができた。6グループが作成した4~5分の動画には字幕が付され、視覚面にも配慮がなされていた。動画再生後には、台湾側の学生がZoomを通じて簡単な挨拶と補足説明を行い、日本側の小中学生と教員が質問をする形で質疑応答が行われた。ここまですべて日本側の児童生徒の授業時間である45分間で実施した。第1回の遠隔授業ではプログラムはここまでで終了し、Zoomの画面共有の不手際なども重なり、交流時間の不足が課題となっていた。今回は前半の視聴パートに45分を充てた後、台湾側の授業時間の残りの45分間を学生と日本側の教員による質疑応答や議論の時間とした。日本側の児童生徒は発表パートのみに参加し、のちに教員が感想・質問を取りまとめて台湾側へフィードバックした。授業の録画は、参加できなかった児童生徒のために後日YouTubeで限定公開し、視聴できるようにした。授業後に実施された台湾側学生へのアンケートでは、2023年(n=17)と2024年(n=21)の比較で全般的な上昇傾向が見られた。5段階評価で日本語学習意欲3.9→4.2、チームワーク4.1→4.5、国際交流4.1→4.4、病児支援4.2→4.5と各項目で高い評価が得られた。自由記述からは、「字幕や原稿作成を通して日本語の表現力が向上した」「動画制作が楽しく、協働学習に役立った」「また日本の児童と交流したい」といった意見が見られた。これは授業構成の見直しにより、プレゼンに集中できるとともに学生と日本側の交流や議論の時間が確保できた事が大きいと考えられる。

6. まとめ

本研究の二年間の実践は、院内学級という制約条件下においても、授業設計の工夫により国際協働学習が高い教育効果を発揮しうることを示した。動画の事前提出と配信の一元化は、接続トラブルの影響を最小化し、限られた授業時間を学習活動に集中させるために有効であった。字幕の付与は、児童の理解を支えるだけでなく、学生側の言語意識を高め、表現の明確化と簡潔化を促した。自由記述の分析からは、学生が受け手を想定して表現を取捨選択する

過程で、日本語表現を再構築する学習が見られた。また、児童にとっては、病棟にながらも外部世界とつながる直接的体験が、学習意欲や心理的安定に寄与していることが示唆された。今後は、他の院内学級や自宅療養中の児童生徒との連携をさらに進め、より多様な交流の形態を検討していきたい。加えて、参加児童の質問を支援する仕組みを導入し、参加者全員が積極的に発言・交流できる体制整備も課題である。

参考文献

1. 横山強「特別支援学校の分教室における ICT 等の活用実践例について」『特別支援教育』, No. 58, pp. 28-33 (2015)
2. 山本裕一・西堀ゆり・吉田徹『掲示板型ツール「コラボード」と「コラボード広場」による院内学級での協調学習—院内学級での遠隔協調学習におけるシステム構築—』教育システム情報学会第 29 回全国大会講演論文集, pp. 55-56 (2004)
3. 西堀ゆり「院内学級と北京を結んだ遠隔教育—テレビ会議システムによる異文化理解教育の試み—」教育システム情報学会第 36 回全国大会講演論文集, pp. 404-405 (2011)
4. 山本裕一・井口晶裕・島田貴弘・小柳千佳子「小児病棟への学びのための高速ネットワークの導入について」大学 ICT 推進協議会 2020 年度年次大会講演論文集, FB1-4, pp. 296-297 (2020)
5. 山本裕一・佐藤修・小柳千佳子・濱田和・佐藤聖子・西牧謙吾「TV 会議システム、モバイル機器を利用した複数の院内学級による台湾に関する異文化理解授業」教育システム情報学会第 44 回全国大会講演論文集, F6-2, pp. 437-438 (2019)
6. 山本裕一・楊錦昌・謝昀叡・小柳千佳子「院内学級における台湾輔仁大学で日本語を学ぶ学生による異文化理解授業」教育システム情報学会第 49 回全国大会講演論文集, pp. 285-286 (2024)